



「共生社会」を考える

トピック



ぐんま教育文化フォーラム

共に生きるのは難しいのか？

2024 年も世界のあちこちで戦争や紛争が絶え間なく続く年だった。その発端や理由は様々だが、宗教・民族・文化の違いや貧富・身分制度・権益・領土・資源などをめぐる人間同士の争いが内乱や紛争となり、やがて国家間の戦争へとエスカレートしてゆく。大量の武器・弾薬を消費して殺人と破壊が公然と行われ、人々の憎悪と恐怖・悲しみが交錯しながら、最後には死しか残らない不毛な行為。そのことを誰もが知りつつ、なお戦争が止まらない現実を前に、人間が社会的動物であることへの素朴な疑問がふと頭をもたげる。

「共に生きるのは難しいのか」と。

多くの人が集団で生活するには、互いの違いを認め合い助け合うことが基本だが、その違いが争いや憎しみを生むことも多い。いじめの発端の一つに異質者の排除があり、不満やストレスのはけ口に自分と異なる存在を標的とする心理は、人間が集団で生活するために背負った業(ごう)のようなものと考えるのはあまりに罪深い。とはいえ、絶え間なく続く戦争やいじめの話題を耳にする毎に、解決法の見つからないもどかしさを感じつつも、「共生社会」の嘘っぽさには辟易する。

群馬県教育ビジョンでは

群馬県教委が鼓吹する「群馬県教育ビジョン」(以下、「ビジョン」)では、その最上位目標を「自分とみんなのウェルビーイングが重なり合い、高め合う共生社会へ向けて一ひとりひとりがエージェンシーを発揮し、自ら学びをつくり、行動し続ける『自律した学習者』の育成」としている、とのこと。

県の教育分野での施策主体である県教委が「ビジョン」(=展望・夢)をどう描こうと勝手だが、その一見立派な趣旨なり願いなりを無理矢理県民や子どもたちに押しつけることは

勘弁してほしい。ましてや、それが教育現場を一人歩きし「エージェンシー」(後掲参照)を具現化するための業務が教員を責めさいなみ、貴重な学習時間を子どもたちから奪うことになるのであれば大問題だ。

ウェルビーイング指数(幸福度)がG7中最下位の日本において、チャレンジングな姿勢は買うものの、「自分とみんなのウェルビーイングが重なり合い、高め合う共生社会へ向けて」といういささかキャッチーな文言では、様々な確執がせめぎあう日本の現実から目を背け、県民に自助・共助を求めるばかりの浅

薄な印象しか残らない。

この最上位目標の副題に含まれた「エージェンシー」に関しては、「ビジョン(原案)」に対するパブリックコメント(2024年1月提出、フォーラムウェブ

順位	国名	総合幸福度	
1	フィンランド	7.741	上位10カ国
2	デンマーク	7.583	
3	アイスランド	7.525	
4	スウェーデン	7.344	
5	イスラエル	7.341	
6	オランダ	7.319	
7	ノルウェー	7.302	
8	ルクセンブルク	7.122	
9	スイス	7.060	
10	オーストラリア	7.057	
15	カナダ	6.900	G7各国
20	イギリス	6.749	
23	アメリカ	6.725	
24	ドイツ	6.719	
27	フランス	6.609	
41	イタリア	6.324	
51	日本	6.060	

「提言」所収)で批判的に論じたが、この「エージェンシー」を「社会をより良くするための意識と行動」とする群馬県独自の解釈によって、個人は社会貢献をするために存在するかどうかのような倒錯した拡大解釈が昨今の群馬の教育現場を支配していることを、この際改めて指摘しておきたい。

「群馬ならではのインクルーシブ教育」とは？

また、「ビジョン」では「群馬ならではのインクルーシブな教育の構築」という文言で、

インクルーシブ教育を推進する方向性を示している。(Ⅲ各論／2群馬の教育を推進する基盤となる重点政策／政策③これからの時代の学びを見据えた体制の整備／主なテーマ(3)インクルーシブ教育推進に向けた体制整備／)

しかし、そのためのインクルーシブ教育推進有識者会議(第1回2024年6月実施)では、インクルーシブ教育の捉え方自体が有識者毎に多様だった。曰く「群馬のインクルーシブ教育とはこういうものだとはっきりとあるわけではない」「これまでと何も変わらないと捉える方もいる」「国際的に流通する概念との関係を示すことが必要」「中身が抜けて形だけが動こうとしていることに違和感」「インクルーシブな学校という看板に変えただけ」「特支校は共生社会の実現を目指し児童生徒の自立と社会参加が目標」…。このような議論の末、「何のためかを詰めないままの外国調査はやめるべき」「群馬県が目指すインクルーシブ教育の共通概念をもてるように取り組むことが大事」との発言で会議が締めくくられた。

(<https://www.pref.gunma.jp/page/653936.html>)

この会議の様子で、群馬のインクルーシブ教育はまだその緒に就くはるか前であることがわかる。



だいたい、まだ何も決まっていないうちから「ビジョン」に明記された「群馬ならではのインクルーシブな教育」だが、独自性をアピールするらしい「群馬ならではの」と、包括性を意味する「インクルーシブ」が詰め合わされた言葉の「座りの悪さ」には、なんとも失笑を禁じ得ない。

シンポジウムに参加して

「推進ありき」の方針ばかりが先行する現状に懸念を抱きつつ、県教委主催のシンポジウム「共生社会って何だろう」が開かれると聞き参加してみた。有識者会議の席上でもその意義が疑問視された海外視察(9月実施)の

共生社会って何だろう～今私たちにできること～

申込不要

年齢、性別、国籍、障害によらず、すべての子供たちが同じ場所で共に学ぶために必要なことを一緒に考えてみませんか



12月7日(土) 10:00～12:00 32階 NETSUGEN
司会:宮坂あつこ様 (FM桐生アナウンサー、ジョブラボぐんま代表等)

報告や、「群馬ならではのインクルーシブな教育」に関する議論の進捗もわかるのではと期待したからだ。

しかし、モデル校の実践報告やシンポジストの情報提供・トークセッションに多くの時間が割かれ、期待をしていた議論の進捗に関する情報を得られないまま2時間の開催時間はあっという間に終了した。

とはいえ、シンポジストの一人から「多文化共生社会に向かうには、違いを感じながらも共通ポイントを見つけて交流することが大事」との指摘には共感を覚えた。子どもの時に受けたいじめの体験や、自分と異質な人を忌避・排除しようとする人たちへの情報発信の困難さを痛感しながら得た貴重な見解だ。さらに、外国籍の子どもの就学義務化や国際教室のあり方へ一石を投じる発言は大変興味深く、このシンポジウム参加の収穫となった。

真の「共生社会」実現を目指すには

私たちは聾学校やみらい共創中学校の取材を通して、障害の有無や国籍・性別・貧富の分け隔てなく、誰もが等しく学ぶことができる教育環境について考え続けてきた。それは、聞こえの良いキャッチコピー一つで片付けられるような生易しいものではなく、教員の犠牲でようやく成り立っている学校の看板をインクルーシブと付け替えたものでも、もちろんない。少なくとも、インクルーシブな教育の構築のためには、県内のすべての学校に対する全国平均以下の公的支出額(P18参照)を、せめて全国並みに引き上げる必要がある。

これまで万事安上がりに済ませてきた群馬県がインクルーシブの美名のみを鼓吹することで、今以上の負担を教員に強要し、不十分な学びをすべての子どもたちに強いることにならないか、注意深く見守りたい。